

基調講演

自分に負けない心を育てるには



公益財団法人日本体育協会
日本スポーツ少年団 副本部長

三屋 裕子 氏

それぞれの個性を大事に

私は小学校を卒業するとき、身長が170センチありまして。5、6年生の2年間で30センチ伸びたのです。身長が原因で、仲間はずれや陰口、無視も始まり、自分の身長が大嫌いでした。

中学校に入学してすぐ、ある先生に問われました。「人よりも高い能力を身につけるためには、死に物狂いの努力をしなければいけない。でもお前は見るからに人と違うものを持っている。なぜ、それをおうとしなのだ」「こんなもの何に使えるのでしょうか」と言う私に、先生は「バレーをやれ。お前が恥ずかしいと思っているものが、財産に変わる」と仰いました。こ

の一言で私の人生が決まったのです。

今、私は子供たちに「人と違っていいのだからね」と、必ず伝えていきます。足の速い子もいれば、遅い子もいる。速い子は短距離選手を、遅い子はマラソン選手を目指せばいい。

筋肉の質は、持って生まれたものが大きく影響し、足が速いのも遅いのも個性の一つと考えられます。子供の能力を、大人の価値観で限定してしまうことがありますが、身体的特徴によって

選択肢は広がるのです。スポーツは、未知なる可能性の扉を開けることのできる素晴らしいもの。私はバレーボールに自分の人生を救ってもらいました。

自分との勝負もたくさんしてきました。練習は辛いし苦しい。私はオリンピックを通して、夢や目標は近づけば近づくほど苦しいのだと感じました。「もう辞めよう、辞めたら楽になれる」「自分と闘う私を支えてくれたのは、母がくれたおまじない」「逃げては何も始まらない」でした。なぜ、あの時もう少し頑張れなかったのかという悔いは、頑張れば頑張るほど影のようについてきます。自分に負けるのは

本当に惨めですし、自分に勝てない人間が他人に勝てるはずがない。おまじないを胸に毎日、体育館に行きました。オリンピックの結果は銅。金メダルが欲しくて頑張ってきたので、表彰台から降りた瞬間、メダルを外しました。しかし、時間が経つにつれ、「あのきつい練習に耐えられたのだ」、「勝負は負けだけれど、自分にだけは負けなかった」と思えるようになりました。その時初めて、「オリンピックは参加することに意義がある」と、私なりに理解したのです。

自分との闘いはどう打ち勝つか。それを最も如実に現してくれるのがスポーツです。スポーツを通して自分と正面から向き合っていく、そして自分の弱いところも分かりながら、自分の強いところを増やしていく、そんな子供たちが育っていくことを心から願っています。

